

# 家族成員の關係変容

——シンボリック相互作用論の検討を媒介として——

渡辺 牧

いかにすれば家族成員の相互作用を通じて自己実現への道が開かれ、同時に社会に開かれた家族が可能でありうるか。本稿は、家族成員間の相互作用を通じた關係性の変容に焦点をあて考察する。この問題解明の為の理論装置への一手掛かりとして、シンボリック相互作用論の検討、とくにG.H.ミードの「I」と「me」の拡大再定式化を試み、さらにケース・スタディの分析を行う。

## I. 序

「妻は妻らしく」「夫は夫らしく」——といった性別に起因する家族内の役割意識は、拭い去ろうとしても容易には拭い切れぬ痕跡を、今日、私たちに負荷している。日本における戦前からの固定化された家族内の性別役割意識の残存およびその変容可能性の問題は、巨視的には現代資本主義社会のダイナミクス、個別的には家族成員の自己実現の可能性をめぐる検討が急務になっている。

家族のことを想い、家族の為に立ち働く人間の姿は、家族外の社会の様々な作用に対して、人間の家族は最後の一抛り所であることを意味している。子供の病いを治してやりたいという親の心は、医師や教師や友人よりも強いのではないか。家族の存在形態が容易には変わりえない——ということは、家族が生活における防衛線であることに起因している。

だが一方では、社会からの防衛線としての家族が、成員の個別の生き方の可能性の阻害要因となる可能性もある。夫に献身しようとする妻が、家族の外に視野を切り拓こうとする志向性<sup>(1)</sup>を自ら抑圧した場合には、IIのケース・スタディでみるように、夫以外の社会諸關係上での自己の生き方を閉塞してしまう場合もある。「妻子

の為に」を最優先して生きようとする夫は、妻子以外の社会的諸關係上の可能性を圧殺しかねないのではないか。

以上から、次の課題点を仮説的に呈示したい。  
①生活者としては、家族は、成員の急病といった状況で顕在化するように、家族成員の為の社会からの防衛線という現状維持的な位置付けをせざるをえない。②①が強まるほど、個々の家族成員の家族外への諸關係を切り拓き、自己固有の人生における目標への接近は阻害されがちとなる。③だが一方で、家族成員は家族の生活史形成の中、相互作用の連鎖を通じて、家族内から社会に開かれた自己実現の契機、チャンスを発見可能でもありうる。その場合は、家族の生活史のある契機を媒介に、成員間の關係性が単に家族存続の為という因習的、防衛的限界を乗り越えることを志向し合うことが要件となる。

家族を論ずる重たさは、①が意味する生活者としての倫理に基づく。例えば共稼ぎ家庭を営むある夫は、妻の勤務時に、研究会への参加（家族外との関係）と、子の面倒をみることの二者択一を迫られれば、前者を択することは極めて危険——無力な幼児がもし怪我をしたら取り返しがつかない——であり、親の責任として後者を択らねばならない。しかし、後者のみが連

続したならば、彼の家族外との社会諸関係の可能性は減の一途をたどる。そのことは、彼が家族外との関係性のもと日常生活への視点を更新し、家族外の社会の動的な風を家族にもたらず可能性の減殺をも意味する。上記の課題から離れず、同時に家族の可変性を考えることなしに、成員個々の人生の目標への接近、そのことを通じた家族の活性化、即ち家族と社会とのよりダイナミックな応答関係を捉えることはできないのではないか、というのが私の基本的問題関心である。

以上の問題関心に立ったうえで、本稿では、「家族成員間の相互作用を通じた関係性の変容」に焦点をあて、とくに夫-妻の関係性に関し、ケース・スタディを出発点として考察を試みたい。次に、この問題を解明してゆく為の理論装置への1つの手掛かりとして、G.H. ミードを中核とするシンボリック相互作用論——とくにミードの「I」と「me」を中心として——を家族研究との関連から検討し、最後に拡大再定式化を試みた「I」と「me」を応用してケース・スタディの分析を行う。

## II. ケース・スタディ——高群逸枝と橋本憲三夫妻の関係性をめぐって——

ここでは、日本母系制社会の実証研究に半生をかけて取り組んだ高群逸枝(1894-1964)とその夫、橋本憲三の結婚当初の関係性の葛藤と、そこからの脱却の過程を、高群の自伝『火の国の女の日記』に即して再現してみたい。以下は高群の側から見た夫妻の関係性の変容である。

高群(以下Tと略記)は、橋本(以下Hと略記)との同志的夫婦愛を志向して結婚した。だが独立した新世帯をもつと、Hは次々と居候を呼び入れ、多い時は4、5人の居候が寄宿、梁山泊的な生活が続いた。HはTに対して、夫に

負担をかけず夫に献身する世話女房たることを要求した。こうした生活はTに「男は家もって前からの生活。女は夢多き娘が、下女兼女将型へと変異を迫られる」と言わしめた程、家事、夫へのサービスの負担が重くなった。

「Tは、優柔不断で、『曲従』のみをこれこととしていた。その反面には、いやというほどそれと衝突する個性が内在しているのだが、それをまた本来的な『愛と平和』への希求が押さえつけるというわけで、二重三重の内攻した苦しみを重ねている」「そのころの私の手記には、自分の学問や理想への要求は影を没し、ただこの梁山泊の世話人としての努力の足りなさのみが自戒として連記されている」(高群〔1974：上巻352〕)。

1924(大正13)年10月6日の日記には、Tは「きょうの反省-夫に口答えをしたこと。花札常連がきて、夫が酒買いにゆけといったのに、私は原稿を書いているからいけないといい、夫が叱ったので口答えをした。悪かったと思う」と書いた。その一方では、Tは、「自分には曲従癖がある」と嘆き、夫婦関係を存続させる為、下女のような暮しに妥協する自己への嫌悪を書き残している。だが、無軌道な風来坊生活から、Hが出版社に職を得て生活が安定すると、Tは「この期を逸してはならないと私は決心した。……婦人論の著述に生涯を託するつもり」と家出する。夫に連れ戻されたあと、TはHに「従来のおいまいな姑息な態度を一擲して、はっきりとHに夫婦の尊厳への認識を求め」(同上：361)、女学校時から芽生えた学問的欲求の具体化を志向する。

「夫婦生活を重くみる私の傾向から、この欲求がHとの融合をそこねることのないようにねがっていたが、それはひどく控え目な表面化されない形をとっていた」(同上：392)。

昭和5年前後の世界的金融恐慌による日本農村の疲弊化、それに伴う母子心中、娘地獄などの家父長制下での農村女性へのしわ寄せという時代情況も一契機となり、Tは女性史の実証研究への志向を固め、Hに同意を促し賛意を得た。2人の関係性の変容をTは「相知って以来、興味あるじぐざぐなコースをたどってきた…私はとことんまで従順だが、窒息間ぎわになると、火の国の女の野性をまる出しにしてしまう（ただし愛と尊敬とだけは相手の出方の如何にかかわらず絶対にかわらない）。これにたいしてHは、私が従順な間は無感覚で図々しいが、私が原始的な自由性をあらわして立ち向かうと、急に理性のある男になってなだめ役にまわる。こうしてすこしずつ2人は完成していった」（同上：360）と述べている。

1931年から、Tは研究に専心し、Hは彼女の研究の相談役を務め、文献収集に協力し、家事も担当し生計を支えた。Tが母子保障社会の必然性実証の為に女性史研究を志した一契機は1922（大正11）年の長男憲平の死産だと言われるが、それより研究着手が10年近く遅れた一因は、生計が不安定でTが売文活動を続けねばならなかったことによる。その点、経済的にはHが定職に就き安定収入を確保したことは、Tが売文を抑制可能となった点で大きかった。<sup>(2)</sup>

### Ⅲ. シンボリック相互作用論の視座と家族成員の関係変容

Ⅱで再現したT夫妻の事例は、一つには夫婦関係の相互作用を通じ、それまで自己実現を阻まれていた者が相互の関係変容の中で自己実現へ向けて歩み出す一事例である。T夫妻の例にもみられる様に、家族成員の関係変容は、成員間の相互作用だけではなく、社会情況の影響や家族外の重要な他者たちとの相互作用などの諸

要因が仮定される。以下では、それらの中で、家族成員間の相互作用という要因に焦点を絞り、それを解明する一手掛かりとして、シンボリック相互作用論（以下、S Iと略記）の視座に関し基礎的検討を試みたい。

S Iの理論的中核G. H. ミードは、「人間は刺激への単なる反応有機体ではなく、そのような刺激に対して『意味付与』を行ない、それを『シンボル化』することによって、与えられた刺激を選択し、再構成し、修正することができる能動的存在」（船津〔1976：12〕）だとして、人間の自発性や主体性を強調する社会理論の構築をめざした。ミードは人間が物理的、生物学的環境とは異なる「意味、シンボルの世界」に生きることを重視し、あわせて意味やシンボルが自他の相互作用過程から形成されると考えた（同上：13-14）。こうしたミード思想の核心的主題として、椎野は「I」と「me」の動的な過程（本稿ではVで論述する）を捉えた自我論としてミードを理解し、さらにその批判的検討を踏まえた社会論の展開を示唆している（椎野〔1978：53〕）。また好井は「ミードは社会を外から拘束を与える客観化された構造としてよりむしろ、現在を生きる我々と常にかみ合う動的な相互主観的な過程として考えた」「ミードの思想の核心は人間の心をも視野に収めた社会の構成についての説明ではなく、社会をも視野に収めた人間の“心的なもの”の構成」（好井〔1980：56-59〕）だと論じている。一方、J. Urry はS Iについて「個人は社会の奴隷ではないが故に、両者は決定的関係性というより弁証法的関係性に立つ。社会が個人を構成すると同様に個人が社会を構成する…行動の構成は他者とのコミュニケーションを通して生まれる」（Urry〔1973：6〕）と言う。これらの指摘を踏まえつつ、私の問題関心からはS Iから摂取

すべき最大の点は、人間は環境に対し単にロボットの受動的、従属的反応だけではなく、シンボルを媒介に情況の解釈、再解釈を行い、社会的世界に対し能動的、主体的反応を行い、情況変革の可能性をもちうることをミードが理論化した点だと思われる(Mead〔1934→1973〕)。

S Iの視座から家族を視る際の固有の対象領域は、制度としての家族ではなく、家族成員相互の役割期待、役割取得、役割演技、社会化、コミュニケーションなど、家族の内的過程(inner process)である(Wesley, R. Burr他〔1979: 42-111〕)。相互作用の一特質は、人はシンボルを媒介に相互の行為の意味を解釈し定義し直す点にある。例えば妻の夫への反応は単に夫の行為への受動的反応だけではなく、両者がそうした行為に付与する意味を自己反省的に解釈し直して夫に反応しうる。相互作用論者のイメージでは、人間は自己反省的存在(self-reflective beings)として定義される。(Meltzer他〔1975: 2〕)。一方、家族成員の相互作用は、彼らがおかれている情況に対処する為の諸行為から構成される。以前の相互作用を通じた相互主観的理解は、家族成員に、特定の情況下、いかに行為するか共通の準拠枠と情況定義を発展的に形成させる。このことが、家族成員が家族の慣習に従い、相互の役割期待に応じ合うことを可能にさせる要因となる(Schvaneveldt〔1966: 118-120〕)。だが、家族成員の相互作用を媒介とした情況の定義は成員の間で必ずしも一致する訳ではない。情況の定義は成員1人1人の解釈行為から始まり、成員間の定義が不一致のとき葛藤が発生する。こうした葛藤を解決する為、家族内でコミュニケーションを重ね、情況の定義を修正し合い、相互の役割遂行をめぐる交渉を重ねてゆくのが家族内の相互作用の一特質と言えよう。一方、

家族の相互作用的経歴(interactive career)という観点からみると、家族の生活史のある時点で相互作用を通じて形成された成員の役割期待、役割取得関係は、その後の成員の相互作用に影響を及ぼす(McCall & Simmons〔1966: 165-225〕)。だが、前述した様にS Iの視座からみると、ある時点での役割期待関係はその後にも固定的、因習的に存続するというより、シンボルを通じた社会的相互作用の時間的流れの中で、それらの役割期待は選択、修正、再構成され、家族成員間で再交渉が継続的に行われうると解釈可能である。以上の点から、S Iは家族成員の相互関係の変容という問題を検討する方法論上の一手掛かりとなると思われる。

#### IV. シンボリック相互作用論における家族研究の系譜

次にS Iにおける家族研究の系譜を跡づけておきたい。Schvaneveldtによると、第1はBurgessからWallerにかけて定式化された。Waller〔1938〕は、Burgessに従って、家族を、相互作用する諸パーソナリティの一単位と定義した。ただし、Wallerは、Dollard〔1935〕による「各家族は所与の文化的環境における歴史を伴う」との定義を付加した。第2はHill〔1951〕で、パーソナリティ発達のプロセスを家族の相互作用によって影響されるものとして拡大解釈した。Hillは家族の定義を、Wallerの言う「相互作用する諸パーソナリティの一単位」から、「相互作用する諸パーソナリティの一舞台」へと変更した。この様に、WallerとHillは、家族を相互作用の枠組から視ることを示唆したE. Burgessの考えをさらに発展させて、家族を従来の、静態的な社会的単位と捉える制度的視点から、生きられた動きつつある単位という視点へと更新させたのである。さらに、Stryker

[1959, 1964], Hill & Hansen [1960]らは、家族内での社会化、パーソナリティ形成、役割取得、アイデンティティ形成などの諸概念を、S Iの理論枠組からの応用として明確化していた。これまでS Iの影響を受けた家族の内的活動の研究で大きな関心を得てきたものは、異性とのつき合い(dating)、配偶者選択、夫婦間の役割関係の調整、親子関係、家族のコンテキスト下でのパーソナリティ形成の諸問題などである(Schvaneveldt [1966: 102])。Schvaneveldtは、S Iにおける家族研究の特質として次の3点をあげている(Schvaneveldt [1966: 119])。

① S Iは人為的にコントロールされた枠組下での実験というよりむしろ、自然な観察、インタビューなどに焦点をあてる。

② S Iは、家族の諸関係を継続的に流動的なものとの仮定に立つ。家族における社会生活は「均衡」というより「過程」と捉えられる。

③ S Iは、あらゆる社会的事象は個別の家族成員によって解釈され、特定の意味をもつとの仮定に立つ。

以上3点の含意は大きいですが、本稿では②と③の特質の一端を解明してゆく。次に、ミードの「I」と「me」概念を導入して、家族関係の考察を進めたい。

## V. 「I」と「me」概念の拡大再定式化と家族研究への応用

夫婦間の役割関係に線引きをするのではなく、役割関係の可変性を展望する為の分析装置への手掛かりとして、ここではミードの「I」と「me」を検討したい。

### (1) ミードによる「I」と「me」の定義

ミードは、「I」と「me」を自我の動的過程を構成する二側面ととらえ、「me」に関しては

「自分自身の行為に影響しているとある個人が想定して取得した他者の構えの組織化されたセ<sup>(3)</sup>ット」(Mead [1934 → 1973: 187])と定義する。

「フロイドの表現を借りるなら、『me』とはある意味での検閲官である。それは、おこりうる表現の種類を決定し、舞台を用意し〔行動開始の〕合図を与える」「社会統制とは、『I』の表現に対する『me』の表現である」(同上: 223-224)「自我意識をもつためには、自分がまさにしようとしていることを制御するような他人の態度を自分自身の生物体のなかにもたねばならない。そういう態度を採用するときに、その人の自我の即時的な体験のなかにおこるのが『me』である」(同上: 209)。これに対し「I」は、「他者の態度に対する生物体の反応」であり、「かれ自身の行為に含まれている社会的状況を越えていくかれの動作で、かれが動作を遂行してしまった後ではじめてかれの経験の中に『I』が出現してくる」(同上: 187-188)と定義される。

### (2) 「I」と「me」概念の拡大再定式化と家族研究への応用

次に、ミードの「I」と「me」を、家族成員の関係変容分析への一手掛かりとする為、拡大再定式化を試み考察を進める。はじめに、「I」を2種に分節化し、「人生における自己実現を社会に開かれた形で志向する自我の創発的作用」を「広いI」、「現在までの生活史で形成された自他関係を予定調和的に自明視し、存続させようとする自我の防衛的作用」を「狭いI」と仮定的に定義しておきたい。次に「me」も2種に分節化し、「個人が取得した因習的・現状維持的な他者からの役割期待のセット」を「因習的・現状維持的me」、「因習的・現状維持的な役割期待が修正、変革され、それを個人が取得したものを「再建されたme」と定義してお

く。以上の4種の仮定的定義をもとに、家族における「I」と「me」も「狭いI」、「広いI」、「因習的現状維持的me」、「再建されたme」の4種に分節化し考察を試みたい。

家族における「因習的現状維持的me」は「家族成員が取得した、家族の生活史で形成された因習的、現状維持的な他成員からの役割期待のセット」と定義しておく。この種の「me」は、社会の外圧からの家族成員の守り方<sup>(4)</sup>、成員間のこれまでの関係性の存続のあり方が固定的で、家族成員間の役割関係を固定化させる作用を意味する。昭和30年代以降の高度経済成長期以後の日本社会をみると、大量に増大してきたサラリーマンの非共稼ぎの核家族では、家を守り子育ての役割は妻に、経済収入は夫の役割と、役割関係が固定的な家族が多く、父の労働は子の視界から消えがちで、専業主婦の母は子中心に生きるという、父親不在、母子密着現象が広くみられるに到っている。ここには、家族成員間に「因習的現状維持的me」が強固に残存した、と解釈できよう。このため、成員間の役割関係は流動的、可変的でなく、「夫は夫らしく」という因習的規範に追従する形で固定化され、同時に育児にしる家事にしる、今日まで家族内の閉鎖的営みの性格が強く、家族の外に開き、家族外の世界との交流関係の中で家族を捉え直そうとする姿勢が稀薄であった。

次に家族における「再建されたme」は、家族の他成員からの役割期待内容の構造転換を求めて「広いI」が発動し、他成員からの期待内容が更新されることを通じて形成される、と定義しておく。この種の「me」は、社会からの家族成員の守り方、成員間の関係性が更新、可変的で、社会に開かれた形で役割関係を流動化させる作用を意味する。これは夫婦間での家事・育児の役割分担の見直しのみならず、近年試みら

れつつある、地域における共同託児所作り、共同保育運動などを通じた家族内と家族外をつなごうとする運動においても、役割関係が社会に開かれつつ流動化する一面がみられる。

家族における「狭いI」と「広いI」は、夫から、読書中の妻が「お茶」と要求された場合について考えてみたい。妻の反応としては①いそいそとお茶をいれる、②「お茶くらい自分でいれるべき」と考えるが、夫とトラブルを起したくない為に内心では本意をを残しつつ、お茶をいれる、③夫に自立心を求め、態度変更を迫る——の3種想定される。このうち①の場合を、固定化した役割関係を自明視し、自我埋没的な「狭いI」、③を「広いI」とみることができると思われる。②は、「お茶くらい自分で」と考えたことで、すでに「広いI」が発動しているが、トラブル回避の為、妻の真の意思が夫に対する具体的行為にまでは到らず、「広いI」の全面的発動をめぐる葛藤期だとみられよう。なお家族における「広いI」は、「成員が家族存立の為に活動すると同時に自己固有の志向性を体現してゆく為、家族外の社会に視野を開き、家族内という特殊個別の状況を越え、より普遍的、全体的状況に自己を向かわせ、そのことが再び家族内の相互作用の活性化の為に還流してくる作用」と仮定的定義を試みておく。以上の様に分節化した家族における「I」と「me」から、家族内の役割期待関係をみると、私たちは成員からの役割期待に単に従うだけではなく、役割期待を再解釈し、成員に反作用してゆく存在でもある。子から「遊び相手になってほしい」と期待されても、親は常に応えられる訳ではない。時には期待をしりぞけ仕事に向かう親の行為はその一例である。家族内の役割期待は、家族の内外の現状維持的、慣習的な共同規範の影響を受ける。例えば現在でも、育児、

家事では、母親にかかる役割期待が父よりは大きい家族が少なくない。そうした家族における「因習的現状維持的me」は、防衛的な「狭いI」の作用を招き、成員間の役割関係を固定化し、成員相互の自己実現への志向を阻害すると同時に、家族が社会に開かれることをも阻害しがちになるのではないか。

### (3) 家族における「me」の再建と「広いI」との融合

「I」と「me」は機械的に二分された静的構造ではなく、「I」は「me」の一部として現われ、少し前の「I」が「me」に転じ、今の「I」と内的対話を行うという弁証法的関係にある。即ち「I」と「me」は人間有機体内で継続的に進行する内的対話を担う（McCall & Simmons〔1966：54〕、好井〔1980：149-153〕）。こうした「I」と「me」のダイナミックな相互連関性は、「『I』こそ、われわれが実現しよう、現実の行為それ自体をとおして実現しようとたえず努力しているものにほかならない」（Mead〔1934→1973：217〕）という「I」の創発条件として「me」のもつ意味を浮上させる。即ち、家族成員の相互作用が成員の自己実現のベクトルへと向かう為には、成員間の「me」の再建と「広いI」との融合が重要な目的となる。

「個人が『me』の構造の中に自己表現のための機会を発見しているような社会状況は、いちばん興味深く満足が多い経験をもたらす」「人が熱中できるような状況、『me』の構造そのものが『I』へ門戸を開放するような状況は、自己表現にとって好都合である」（Mead, 同上：226）。

家族内での「因習的me」から脱却し、同時に「広いI」の契機を重視することは、成員の予定調和的まとめ、家族の慣習的規範、秩序を

一時的に脅かすことも予測可能である。具体的にある家族の例をあげると、母親が研究会に出席する日、幼い子供は母から別れて痛苦を味わう。他家に預けられ、あるいは子育てに習熟していない父親のもとで、子供は母の傍らよりは安らげない。だが、子の味わう痛みは、「母が面倒をみてくれることに最高に満足する自分を母は期待している」との、母から子への役割期待を取得（子の「因習的me」）していた子が、役割取得内容をめぐり葛藤を生じた点に帰因する。母が家族外の広い社会で新たな経験を重ね、「因習的me」を刷新し、同時に「広いI」の深化、明晰化を志向することは、現状維持的で閉鎖的な家族存立志向とは異なる、家族と社会とが交流し合う為の新たな母子、夫妻関係への一条件となるのではあるまいか。また妻に対し、因習的に、家事、育児面での貢献をのみ期待する夫は、妻への役割期待内容の構造転換、即ち妻の人間として自己固有の自己実現への期待への転換が問われはしまいか。なぜなら、夫との因習的現状維持的關係の中で、「広いI」へ視野が切り拓かれなかったり、「狭いI」と「広いI」との葛藤から後者の後退を余儀なくされていた妻が、「広いI」を現実的に体現してゆく為には、夫の妻への構えの組織化されたセット、即ち「me」の再建、刷新を前提条件とするからである。

## VI. ケース・スタディの分析——「I」と「me」の拡大再定式化の応用

以上の「I」と「me」の拡大再定式化をもとに、次に、前述したケース・スタディの分析を試みる。夫からの家事、夫へのサービスなどの役割期待の総体を受け入れねばならぬと考え、夫に従おうとしたときのTのHに対する関係性は、「因習的・現状維持的me」の作用が強い

中で、社会に開かれ自己実現をめざす「広いI」は抑圧されていたとみられる。即ち、Tは家族をとにかくも存立、維持させようと判断し、夫婦間のトラブルを回避しようとしたのである。しかし女性史研究への志しを押し殺し、夫にサービスするだけではTは自足できなかった。Tの学問への志向性を背後で支えるものをTの「広いI」だとすると、夫からの使い走りの依頼に口答えしたことを悔いる彼女の心情にみられるものは「狭いI」であり、「広いI」は自ら抑圧していた。梁山泊的生活の中、下女兼女将のような役割を強いられてもなおかつ、「夫婦生活を重くみる」あまり、「因習的・現状維持的me」に傾いていたTが「広いI」を発動する為には、HからTへの役割期待の総体、即ちTの「me」の再建が不可欠であった。このため、TはHに自己の女性史への志しを語り、HのT観の根本的変更を求めた。HがTの学問的欲求を心底理解し、彼女への協力の意思を固めた段階で、Tは女性史研究への専心を決意する。

Hの野放図な生活姿勢のもとでの自己犠牲に疲れはてたTが、それ以前に家出したのは、家族の存続の為にとらわれとなっている「因習的・現状維持的me」を断ち切り、自己実現を図ろうとするTの強い意思の現われだったとみられる。Hは、そうしたTの反作用を受け、Tへの役割期待を「下女兼女将型」から、研究への専心を通じた自己実現、自己表現を企図する妻のそれへと転換していったのである。R. D. Laingの指摘によれば、夫に対して下女型であったときのTは、「他者の意図や期待の、あるいは他者の意図や期待と考えられるところへの屈従から生れる」にせの自己をHに対して役割演技し、自己の真の可能性は隠蔽していたと言える(Laing〔1960→1971:131〕<sup>(5)</sup>)。Tは下女型であったときも、商業ジャーナリズムへの売

文を通じ家族外の社会との結びつきは維持していた。だが売文活動は主に生計面からの要請で続けられたもので、書きたくもないものも多量に書かねばならぬことは、研究への妨げの一因であった。その意味では、夫が定職に就き安定した収入を得るまでは、Tは経済条件からも「広いI」の発動、自己の真の可能性への道をふさがれていたと言えよう。

以上の分析から、Tにとり、結婚生活の当初からHは理想の同志的な夫として彼女の真の可能性を洞察しようとしたのではなく、TからHへの反作用、それを通じて次第にHがTへの役割期待内容を変更し、「Tの本当の生き方は何か」という地平まで視野を広げ理解を深めていったことが析出されよう。またT夫妻の関係性の変容は、結婚当初から両者にとりその方向性が予測可能であったのではなく、夫妻の相互作用の中から漸進的な形で関係性の変容し、Tが「広いI」を体現していったと思われる。

Tは結婚当初から、夫への盲従ではなく同志的夫婦関係を望み、研究への志向性を抱いていた点では、すでにその時点でTの「広いI」が発動しかけていた。だが、夫からの因習的役割期待のもと、夫婦間の葛藤を顕在化させぬことに気を配り、自己の一番望む生き方を抑圧していたことは、Tの内部で「狭いI」と「広いI」が葛藤していたと言える。夫からの役割期待内容の更新をTが求めたとき、Tの「広いI」はさらに能動性を強めたものの、夫がTの真の願いを十分理解するまで、Tの内部の葛藤は続いた。夫がTへの役割期待を更新したとき(「再建されたme」の形成)、Tの「広いI」は初めて全面的に体現してゆく契機を得たのである。Tの「広いI」の体現とは、女性史の研究、著述を通じ、母子保障社会の必然性証明に接近すると同時に、下女的に夫に献身するのと比べ遙



かに社会に開かれた形で、多くの読者、運動家、研究者、編集者らとの応答、交流関係を切り拓いたこと、さらにTが以上の活動の中で広くて深い社会的視野を得たことが、夫との関係性をも更新し、夫妻が相互の自律性、自己実現志向の基盤のうえで絆を深めていったことを意味している。

T夫妻は、家父長制が明治民法をはじめ法的制度的に家族関係を規定、拘束していた時代情況に生きながら、妻が下女兼女将型の屈従生活を脱し学問への専心を通じた自己実現を志向し、夫もそれに最大限協力した点で、歴史的な社会構造的な制約が大枠ではありながらも、家族成員の関係性が相互作用を通じていかにして変わってきて、成員の自己実現が図られてゆくかという一つの道すじを示していると思われる。

## VII. 「複数の広いI」が交流する家族を求めて

本稿のIで呈示した、家族成員の相互作用の連鎖を通じ家族内から社会に開かれた自己実現の可能性を求め、同時にそのことが家族の相互作用を活性化してゆく為には、ミードの「I」と「me」に関してみれば、「因習的・現状維持的me」から「再建されたme」（他者からの役割期待内容の刷新）への転換と、それに呼応した社会に開かれた「広いI」の発動が不可欠である。こうした家族成員の「I」と「me」の根本的構造転換により、家族は、成員相互の情況を超えてゆこうとする能動的な働きかけが稀薄かつ、因習的で役割固定的な家族関係から、相互の役割関係が可変的で相互作用もより活発な家族関係へと転換してゆくことが可能になると思われる。それは社会から孤立し、また社会の外圧から防衛をのみ重視しがちな家族から、家族の相互作用を媒介に社会へ働きかけてゆく開

かれた家族への転換でもある。いわば、「複数の広いI」が交流し合う可能性をもった場として家族を捉え直すことになる。以上の立論に近い家族観を呈示していると思えるのは、米国のオニール夫妻が提案する「開放型結婚（Open Marriage）」である（Nena & George O'Neill [1972→1975]）。オニール夫妻は、因習的な結婚のしきたりにとらわれるときは、配偶者を所有視する習性を捨てきれず、互いを閉鎖的關係に閉じ込める為、「いつでも一緒症候群」が生じ易いと指摘し、これを「閉鎖型結婚（Closed Marriage）」と分類した。閉鎖型結婚の特徴は静的な枠組、世間から閉鎖的、互いにカスガイで相手に対して閉鎖的、計算ずくめ、息苦しい一心同体、役割の固執性、変化をおそれる、他人の所有、夫婦優先で自我埋没、不平等な地位、有限な愛などである。これに対し開放型結婚は動的な枠組、世間に対し開放的、相手に対し互いに開放的、自然発生的、役割の柔軟性、変化に適應、個人の自律性、自己の確立、精神的平等、開いた愛などである、と同夫妻は言う（同上：321-322）。同夫妻は開放型結婚を、夫婦が各々の能力を最大限発揮し、各々が自律性ある個人として人間的に成長可能な自由で柔軟な関係に立脚しつつ、一方の成長が他方の体験を豊かにするような共働<sup>ツナギ</sup>という螺旋状の発展構造を内在化するものと定義している。

同夫妻の「開放型結婚」論は、家族と社会とのダイナミックな応答関係に関する一つの理想態を呈示しているが、家族の実態をみれば、そこには多様な葛藤と矛盾が渦巻いている。その意味では、本稿は「閉鎖型結婚」から「開放型結婚」への転換、脱却過程の一側面を、シンボリック相互作用論の視座、とくにミードの「I」と「me」概念を拡大解釈して考察を試みたものである。

最後に本研究の未解明点と今後の研究課題について触れたい。「複数の広いI」が交流する家族の存立条件をめぐっては、本稿で焦点をあてた家族成員の相互作用から芽生える「I」と「me」の変容可能性だけでなく、成員が家族外との諸関係を生活史の中で通して形成する「I」と「me」の変容可能性の問題の検討は今後の重要課題である。家族内、家族外の二種の関係性は機械的に分離できるものではなく、「I」と「me」を構成する2つの相互作用回路とでも言うべきものである。本稿はあえて家族の内的過程に焦点を絞ったが、家族の外があってこそ内もある以上、この問題はS IのみならずS I以外の他の諸理論の批判的検討をも通じて解明を必要としているのである。

#### 注

- (1) 志向性の定義および個人の志しの具体的深化に関しては渡辺〔1982：74-85〕参照。
- (2) IIでの高群夫妻の関係性の変容過程を再現する為に依拠した文献は全面的に高群の自伝『火の国の女の日記』に依った。夫妻の関係性変容に関しては、夫の橋本憲三の側からの見方による検討などが必要であるが、本稿では資料上の制約もあり、妻の側から見た関係性変容を再現するにとどまった。今後、資料の収集に努め以上の課題に取り組

#### 文 献

- H. Blumer 1969 Symbolic Interactionism: Perspective and Method, Prentice-Hall.
- W. R. Burr et als. 1979 "Symbolic Interaction and the Family" in W. R. Burr et als.(ed.) Contemporary Theories about the Family Vol.II, Free-Press.
- J. Dollard 1935 "The Family: Needed Viewpoints in Family Research", Social Forces 35.
- 船津衛 1976 『シンボリック相互作用論』恒星社厚生閣。
- R. Hill 1951 "Review of Current Research on Marriage and the Family" American Sociological Review 16.
- R. Hill & D. Hansen 1960 "The Identification of Conceptual Frameworks Utilized in Family

みたい。

- (3) ミードの「me」概念は、その後のS Iの「役割学習」(role learning), 「予測的社会化」(anticipatory socialization)などの操作概念の形成に対するカギ概念の位置を占める。人間は他者から役割期待される方法で行為し、感じ、世界を知覚することを学ぶ。同時に、この役割関連の行動は、補完的役割にある人々に向けられるものである故に、人は次第に補完的役割の形成にも洞察を発展させる。予測的社会化は「…ごっこ」という子供の遊びに典型的であり、多くの社会的諸役割を役割遂行に先行して学ぶ。予測的社会化は生涯を通じて進むが、加齢に伴い一般には、役割遂行の諸経験が加えられて予測が行われる。これらの操作概念を収束した形で「me」を捉えることが必要なのである。これらに関してはMcCall & Simmons〔1966：208-210〕参照。
- (4) これは具体的には、職場、学校、地域の近隣関係などで身心両面で消耗、疲労したり傷つき、ときに病いに陥る成員をいたわり、意欲と健康を回復させる営み、あるいは家族成員が交通事故や職場での事故など危険な目に合わない様に注意し合う営みを意味する。
- (5) レインの対人的関係論への分析を試みたものとしては水野〔1982〕参照。

- Study" Marriage and Family Living, vol.22, No.4.
- R. D. Laing 1960 The Divided Self: An Existential Study in Sanity and Madness, Tavistock Publications=1971 阪本健二他訳『ひき裂かれた自己=分裂病と分裂病質の実存的研究』みすず書房。
- T. G. Manis & B. N. Meltzer 1967 Symbolic Interaction: a reader in social psychology, Allyn and Bacon.
- G. J. McCall & J. L. Simmons 1966 Identities and Interactions: An Examination of Human Associations in Everyday Life, Free-Press.
- G. H. Mead 1934 Mind, Self and Society, Univ. of Chicago Pr.=1973 稲葉三千男他訳『精神・自我・社会』青木書店。
- B. N. Meltzer et als. 1975 Symbolic Interactionism: Genesis, Varieties and Criticism, Routledge & Kegan Paul.
- 水野節夫 1982 「R. D. レインの対人的関係論」『社会労働』第28巻1, 2号。
- Nena & George O'neill 1972 Open Marriage-A New Life Style for Couples, M. Evans and Co. Inc=1975 坂根巖夫他訳『オープン・マリッジ—新しい結婚生活』河出書房新社。
- J. D. Schvaneveldt 1966 "The Interactional Framework in the Study of the Family" in F. I. Nye et als. (ed.) Emerging Conceptual Frameworks in Family Analysis, The Macmillan Company.
- 椎野信雄 1978 「G. H. ミードの社会心理学」『ソシオロギス』No. 2.
- S. Stryker 1959 "Symbolic Interaction as an Approach to Family Research" Marriage and Family Living, vol.21.
- S. Stryker 1964 "The Interactional and Situational Approaches" in H. T. Christensen (ed.) Handbook of Marriage and the Family, Rand McNally & Company.
- S. Stryker 1980 Symbolic Interactionism: A Social Structural Version, The Benjamin Cummings Publishing Company.
- 高群逸枝 1974 『火の国の女の日記』講談社。
- J. Urry 1973 Reference Groups and the Revolution, Prentice-Hall.
- W. Waller 1938 The Family: A Dynamic Interpretation, The Cordon Co.
- 渡辺牧 1982 「志向性の社会学序説—ある編集者の生き方をめぐって」『ソシオロギス』No. 6.
- 好井裕明 1980 「日常的状況における自己と他者—G. H. ミードの社会的世界の構造」(未発表)。

(わたなべ おさむ)